（3）コケ植物（苔類）

レッドリストに掲載された各植物について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、これらが目にふれる機会が多いことを考慮し、絶滅種・絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説（コケ植物　苔類）に関する凡例 】

【分類群名等】

対象種の分類上の位置を示す門、綱、科名等を各頁左上に記述した。科の範囲、名称、配列は「日本の野生植物 コケ」（平凡社,2001）に準拠した。科内の配列は、学名のアルファベット順とした。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「植物Ⅱ（維管束植物以外）レッドリスト」（環境省,2007）の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「A Catalog of the hepatics of Japan.」（服部植物研究所報告 99: 1-106, 2006）に準拠した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形　態】

対象種の形態の概要を記述した。一部の種について写真またはスケッチを掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況について、県内・国内・世界での概要を記述した。県内の分布については、過去の記録を基に記述した。また、本調査及び平成 9 年度から平成 12 年度にかけての「レッドデータブックあいち 2001 植物編」作成時の調査において、対象種の生育が現地調査、文献調査及び標本調査によって確認された地域のメッシュ（標準地域メッシュ・システムにおける 5 倍メッシュ）を県内分布図として掲載し、現地調査による確認地域、文献調査または標本調査による確認地域を●印で表示した。絶滅種については過去に分布していた地域のメッシュを表示した。なお、同一メッシュ内に含まれる産地が複数であっても 1 点として表示した。

【生育地の環境／生態的特性】

対象種の生育地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生育状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生育状況（主として現地調査による確認状況）、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献の内、代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【 苔類　執筆者 】

山田耕作

【 苔類　調査協力者 】

次の方々に現地調査、標本提供、資料参照等で協力していただいた。

磯野寿美子　木口博史　木村全邦　西村慶太　平岡照代　水谷正美

服部植物研究所

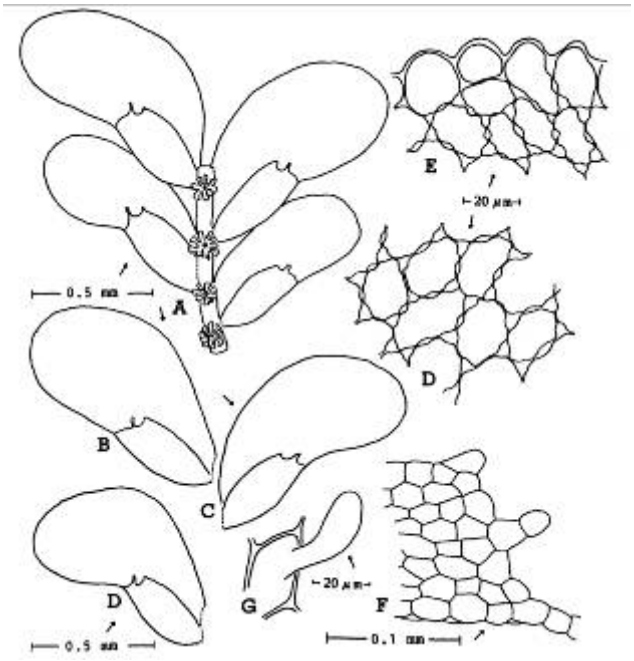
（敬称略）

＜コケ植物　苔類　クサリゴケ科＞　　愛知県：絶滅　　（国：リスト外）
＜BRYOPHYTA　HEPATICOPSIDA　LEJEUNEACEAE＞　　AICHI：EX　　（JAPAN：－）

イボケクサリゴケ　*Cololejeunea denticulata* (Horik.) S.Hatt.

【選定理由】

本種は、湿潤な渓流域に生える樹木の生葉上に生えるため、着生基物としては不安定な状態にあり、生育環境の悪化に伴い絶滅する恐れがある。山間の渓流域に生える葉上着生の一群は環境の変化に極めて敏感であるため、これらの一群を指標にして環境の自然度を評価することができる。



A. 植物体の一部 (腹面観). B-D. 葉 (腹面観). D-E. 葉の細胞 (D.葉縁, E.中央部). F. 葉腹片の先端部. G. スチルス.
新城市 (旧作手村) 杉平～赤羽根, 鳥居喜一 NICH-35583.
山田耕作 描画

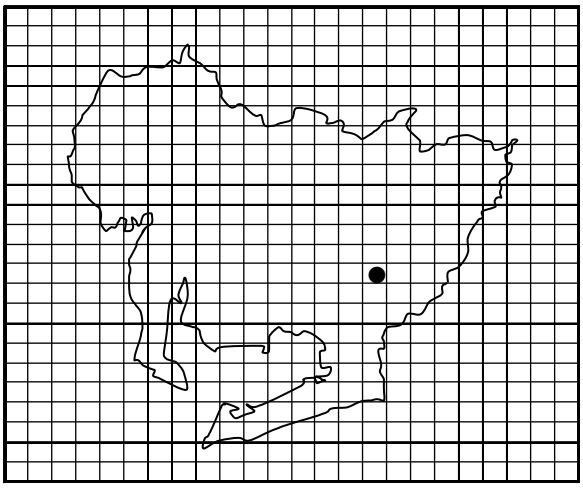
【形　態】

植物体の長さは 5～15mm、葉は茎からうねった状態で立ち上がる。葉は倒卵形から楕円形状、葉の縁には細鋸歯が見られ、先端は円い。細胞の膜は薄く、角隅は大きい。葉下片は楕円形状で頂端には 2 歯が突きでて、中央の歯は 2 細胞からなる。柱細胞は 1 細胞で痕跡状。花被は倒円錐形状で鋭い 5 個の襞がでる。雌雄同株である。

【分布の概要】

【県内の分布】
これまでに、新城市（旧作手村）の 1 箇所から記録されている。
【国内の分布】
琉球諸島を経て、現在、鹿児島、宮崎、熊本、和歌山、三重、愛知、静岡の各県から知られているが、産地は極めて少ない。
【世界の分布】
中国、台湾、日本に分布している。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

湿潤な渓流域に生える低木の生葉上に生える。

【現在の生育状況／減少の要因】

今回の調査では確認できなかった。絶滅したものと思われる。

【保全上の留意点】

森林内外及び渓流域周辺の保全に注意が必要である。

【関連文献】

水谷正美, 1961. 日本産クサリゴケ科の再検討. 服部植物研究所報告, 24: 115-302.（英文）

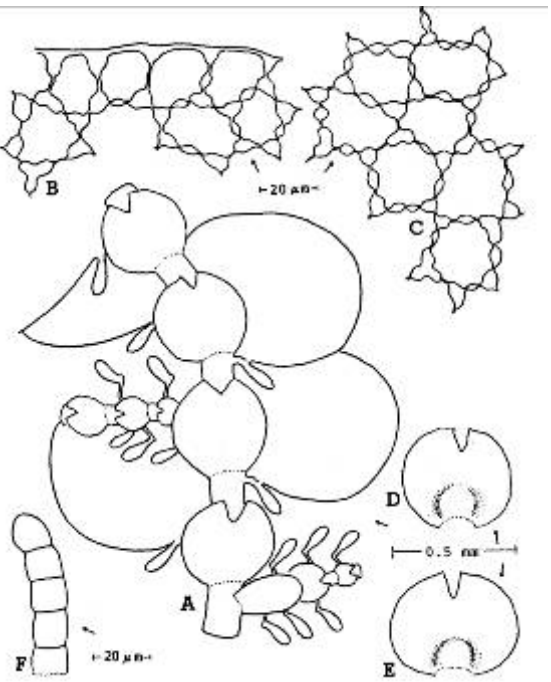
サカワヤスデゴケ　*Frullania sackawana* Steph.

【選定理由】

樹幹上に着生するため、生育地周囲の開発、森林伐採などによる影響に対して非常に敏感で絶滅する恐れがある。

【形　態】

植物体は黄褐色を帯びて、やや大きく 8～10cm の長さ、植物体は葉上片、葉下片、腹葉に分かれ、葉下片は小さくこん棒状。腹葉は茎幅の 4 倍の大きさで円形、頂端は 1/4 まで 2 裂する。葉の細胞は大きく、細胞膜の角隅（トリゴン）は発達してよく肥厚する。雌雄異株である。



A. 植物体の一部 (腹面観). B,C. 葉細胞 (B.葉縁部, C.中央部). D,E. 腹葉. F. スチルス.
春日井市内津町内津峠, 福原稔 NICH-233336.　山田耕作 描画

【分布の概要】

【県内の分布】

春日井市内津町内津峠で一度記録されただけである。

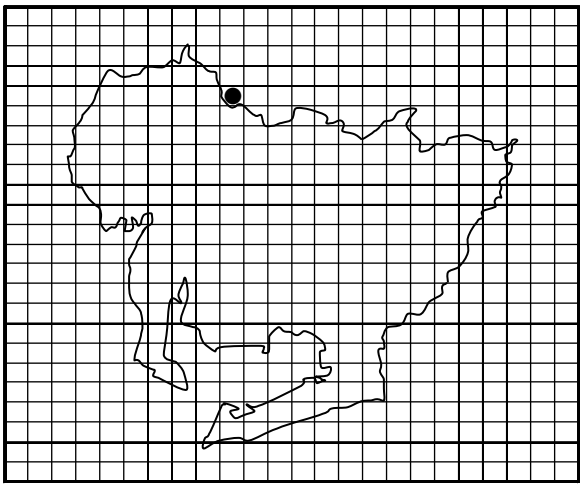
【国内の分布】

九州（熊本県）、四国（高知県）、本州では和歌山県、三重県、愛知県，埼玉県（井上, 1959；入間郡名栗村が北限地である）から知られているが産地は極めて少ない。

【世界の分布】

日本、タイ、ラオス、中国、フィリピンから知られている。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

唯一、春日井市内津町内津峠で採集された標本（福原稔 NICH-233336）は樹幹（樹種名は不明）上に着生していたものである。本種は主に岩上に生えるが、まれに樹幹上にも生える。三重県では岩上、またはスギ、サクラの樹幹上で見つかっている。

【現在の生育状況／減少の要因】

愛知県では絶滅したものと思われる。

【引用文献】

井上浩, 1959. 苔類数種の新産地, 3. 蘚苔地衣雑報 1(21): 2.

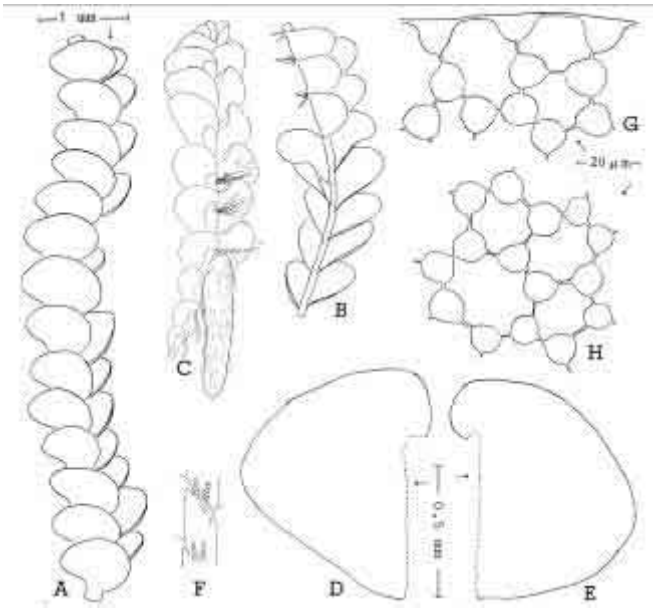
【関連文献】

上村登, 1961. 日本産ヤスデゴケ科モノグラフ. 服部植物研究所報告, 24: 1-109.
児玉務, 1972. 近畿地方の苔類. 大阪市立自然科学博物館収蔵資料目録第 4 集: 117-248. 大阪市立自然科学博物館.
岩月善之助(編), 2001. 日本の野生植物 コケ, 352 pp. 192 pls. 平凡社, 東京.

タカサゴソコマメゴケ　*Jackiella javanica* Schiffn.

【選定理由】

1950 年に名古屋市の東山で一度採集されただけで、その後、報告がない。アジアの熱帯地域から北上して、西南日本に不連続に分布するが記録は少ない。林道に沿った湿った崖、法面の岩上に生えるため、森林伐採、林道の拡張等による人災で絶滅する恐れがある。



A. 植物体の一部 (側面観). B. 植物体の一部(背面観) x 7.
C. マルスピウムを付けた植物体の一部 (腹面観) x 8.　D,E. 葉.
F. 腹葉 x 53. G,H. 葉の細胞 (G.葉縁部, H.中央部). D,E. 腹葉.
三重県尾鷲市三木里, 山田耕作-8508.
B. 孫福･山田(1964)より改写.　C,F. 児玉(1971)より転写.
A,D,E,G,H. 山田耕作 描画

【形　態】

植物体は黄褐色、一般に小形（10～15 mm）で､土上を匍匐、葉は重なりあって斜めにつき、広心臓形、背面はくぼみ、葉先は丸いか鈍形、基部には耳が有る。細胞膜は厚膜でトリゴン（角隅）は大きい。腹葉は痕跡的で微小。多肉袋状で円筒形のマルスピウムは短枝について下垂する。雌雄異株。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市の東山で一度記録されただけである。

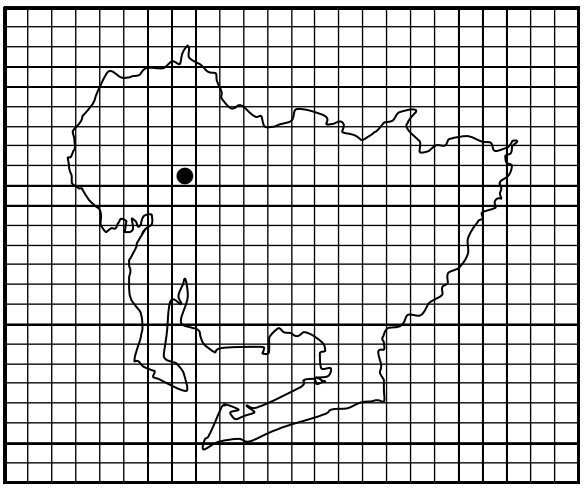
【国内の分布】

琉球から、屋久島、九州、四国、本州では和歌山県、三重県を経て名古屋市の東山（服部, 1952）まで飛石的に知られているが生育地はきわめて少ない。名古屋市の東山が本種の北限地である。

【世界の分布】

東アジアの熱帯―亜熱帯地域から台湾、中国、太平洋諸島を経て西南日本に分布する。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

林道に沿った湿った崖、法面の岩上に生える。

【現在の生育状況／減少の要因】

愛知県では絶滅したものと思われる。

【特記事項】

岩月・水谷（1972）を見ると、国内の分布を静岡県以西としているが正確な記録がない。間違いかと思う。

【引用文献】

服部新佐, 1952. 日本産苔類雑記(15). 植物研究雑誌, 27: 53-54.
岩月善之助･水谷正美, 1972. 原色日本蘚苔類図鑑. 405 pp. 保育社, 大阪.

【関連文献】

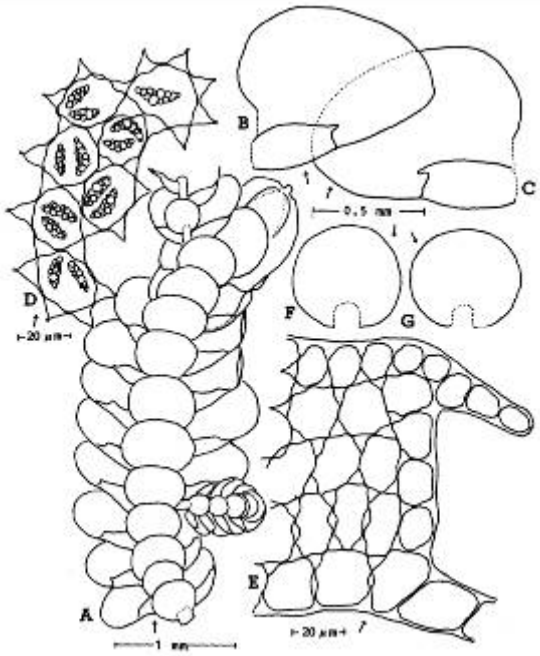
児玉務, 1971. 近畿地方の苔類. 大阪市立自然科学博物館収蔵資料目録第 3 集: 1-116. 大阪市立自然科学博物館.
孫福正･山田耕作, 1964. 伊勢神宮産苔類図鑑. 178 pp. 六月社, 大阪.

＜コケ植物　苔類　クサリゴケ科＞　　愛知県：絶滅危惧ⅠA類（国：リスト外）
＜BRYOPHYTA　HEPATICOPSIDA　LEJEUNEACEAE＞　　AICHI：CR　（JAPAN：－）

キタガワシロクサリゴケ　*Leucolejeunea paroica* N. Kitag.

【選定理由】

樹幹上に着生するため、生育地周囲の開発、森林伐採などの影響に対して非常に敏感であるため絶滅する恐れがある。



A. 花被の下に雄花序をつけた植物体の一部. B-C. 葉.
D. 油体のある葉中央部細胞. E. 葉腹片の先端部. F-G. 腹葉.
新城市岡崎鳳来教育林, 山田耕作-20714.
山田耕作 描画

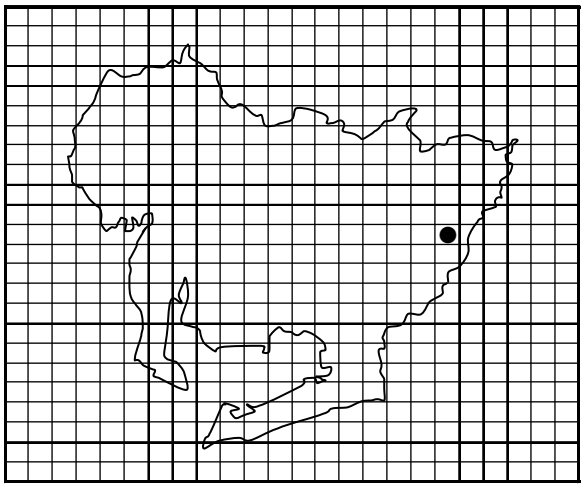
【形　態】

植物体の大きさは 10～15mm。雌花序の真下に雄花序がつく（雌雄列立同株）ので、他の *Leucolejeunea* 属の種と区別ができる。葉の細胞膜は角隅（トリゴン）が発達し、1 個の細胞内にブドウ粒状の油体が 2～3 個見られる。

【分布の概要】

【県内の分布】
新城市（旧鳳来町）から知られている。
【国内の分布】
屋久島、九州、四国、中国、近畿、中部地方に分布しているが産地は極めて少ない。中部地方では愛知県から知られ、この種の北限地にあたる。
【世界の分布】
タイ、台湾、日本に分布している。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

新城市（旧鳳来町）の産地は、環境の保全が行き届いており、林内はかなりの湿度が保たれ、コケ植物にとって格好の場所である。日本の各地における着生基物の記録は、ほとんど樹幹上であるが、稀に岩上にも生える。

【現在の生育状況／減少の要因】

新城市（旧鳳来町）の産地ではヒノキ、スギ、マツ、モミジの樹幹上で見ることができる。

【保全上の留意点】

新城市岡崎鳳来教育林、乳岩渓谷一帯の森林の保全に細心の注意が必要である。

【特記事項】

植物体は、大きいために肉眼でも他の種と識別が可能である。

【関連文献】

小笠原昇一, 1973. 中部産苔類ノート(5). 幸田高等学校研究紀要, 1: 76-79.
児玉務, 1972. 近畿地方の苔類. 大阪市立自然科学博物館収蔵資料目録第 4 集: 117-248. 大阪市立自然科学博物館.

＜コケ植物　苔類　ウロコゴケ科＞　　愛知県：絶滅危惧ＩＢ類（国：リスト外）
＜BRYOPHYTA　HEPATICOPSIDA　GEOCALYCACEAE＞　　AICHI：EN　（JAPAN：－）

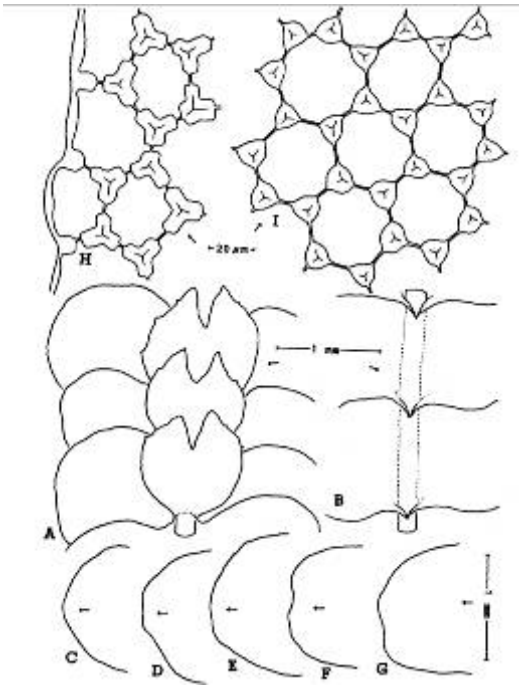
マルバソコマメゴケ　*Heteroscyphus tener* (Steph.) Schiffn.

【選定理由】

本種は、やや高地の湿潤な森林内に生えるため、森林の開発、伐採などに影響を受けやすく、その上に産地もごく限られ絶滅の恐れがある。

【形　態】

植物体は長さ 30mm、葉は広卵形で先端は丸く、背縁の基部は腹葉と連結する。腹葉は大きく幅は茎の約 5 倍で、円形、先端部は 1/4～1/5 まで 2 裂し、両側に 2～3 歯がでる。葉細胞は大きくトリゴンが発達している。



A. 植物体の一部 (腹面観). B. 植物体の一部 (背面観). C-G. 葉の先端部. H-I. 葉の細胞 (H.葉縁, I.中央部).
豊根村 (旧富山村) 豊根口～湯島, 高木典雄-7764.　山田耕作 描画

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村（旧富山村）豊根口～湯島、新城市（旧鳳来町）乳岩に分布している。

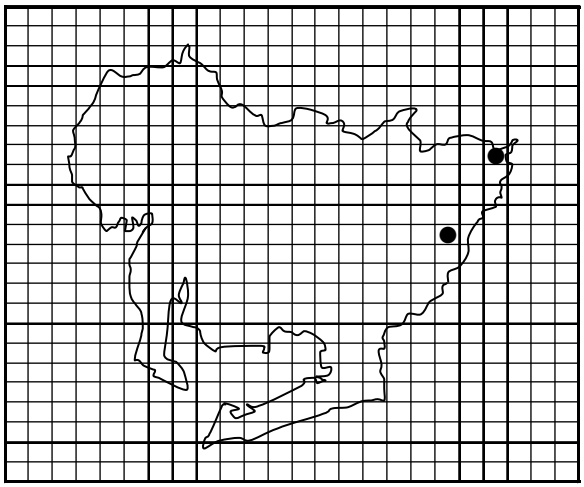
【国内の分布】

琉球諸島から関東地方（群馬県の谷川岳が北限地）以南に分布するが、産地は極めて少ない。東海地方では、三重県、愛知県、静岡県から知られている。

【世界の分布】

セイロン、ヒマラヤ、中国、台湾、日本に分布している。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

やや高地の湿潤な森林内に生える。本種が属する日本産の *Heteroscyphus*（ウロコゴケ属）の仲間は、湿った林内や谷間を流れる小さな渓流域の土上や岩上に生えるが、本種はやや高地の湿潤な森林内の樹木の基部上（稀に岩上）に生える。

【現在の生育状況／減少の要因】

新城市（旧鳳来町）乳岩で確認したが、極めて少ない。

【保全上の留意点】

森林内及び森林周辺一帯の保全に注意が必要である。

【特記事項】

低倍率のルーペでも腹面側にある腹葉の形を見ると簡単に識別できる。

【関連文献】

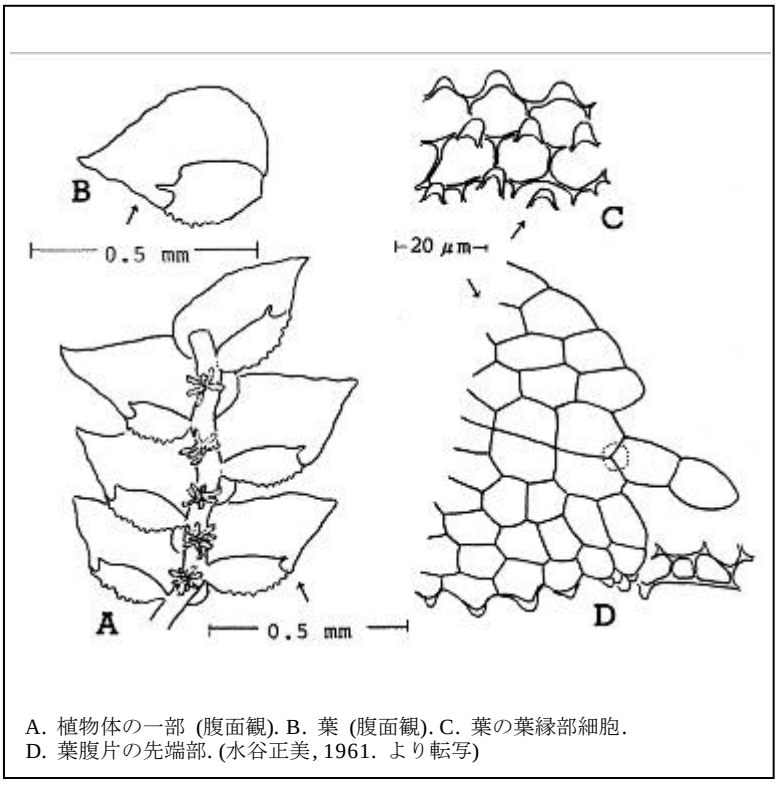
岩月善之助･水谷正美, 1972. 原色日本蘚苔類図鑑. 405 pp. 保育社, 大阪.
岩月善之助(編), 2001. 日本の野生植物 コケ, 352 pp. 192 pls. 平凡社, 東京.

＜コケ植物　苔類　クサリゴケ科＞　　愛知県：絶滅危惧ＩＢ類（国：リスト外）
＜BRYOPHYTA　HEPATICOPSIDA　LEJEUNEACEAE＞　　AICHI：EN　（JAPAN：－）

ナカジマヒメクサリゴケ　*Cololejeunea nakajimae* S.Hatt.

【選定理由】

本種は、湿潤な渓流域に生える樹木の生葉上に生えるため、着生基物としては不安定な状態にあり、生育環境の悪化に伴い絶滅する恐れがある。樹木の生葉上に生える一群は環境の変化に極めて敏感であるため、これらの一群を指標にして環境の自然度を評価することができる。



A. 植物体の一部 (腹面観). B. 葉 (腹面観). C. 葉の葉縁部細胞.
D. 葉腹片の先端部. (水谷正美, 1961. より転写)

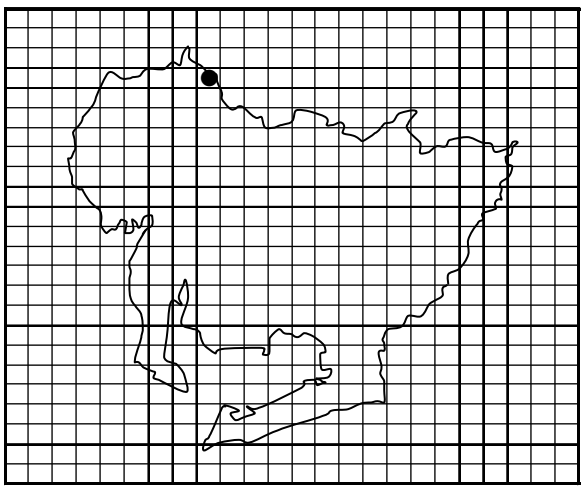
【形　態】

植物体は微小、3～5mm の長さ、葉は卵形で葉先は尖る。葉の細胞膜は薄く、角隅は小さい。背側の細胞の表面に乳頭突起が生じる。葉下片は楕円形で膨らみ、表面の細胞に乳頭突起は生じない。葉下片の頂端に 2 歯がでて中央の歯は大きく 2 細胞からなる。柱状突起は 1 細胞からなり微小。花被の表面は乳頭突起で被われる。雌雄同株である。

【分布の概要】

【県内の分布】
犬山市奥入鹿で一度記録されただけである（高木・小笠原, 1971）。
【国内の分布】
本州からのみ知られ山形県の鳥海山あたりが北限地である。主に、日本海側の深雪地帯に広く分布する。
【世界の分布】
日本特産である。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

日本海側の深雪地帯に広く分布し、太平洋側には少ない。生葉上に生える。

【現在の生育状況／減少の要因】

その後、記録がない。現地調査でも確認していない。

【保全上の留意点】

山間を流れる渓流域一帯の護岸整備、森林周辺一帯の開発には保全に十分な配慮が望ましい。

【引用文献】

高木典雄･小笠原昇一, 1971. 愛知県の蘚苔類. 愛知の植物 167-177 pp. 愛知県高等学校生物教育研究会.

【関連文献】

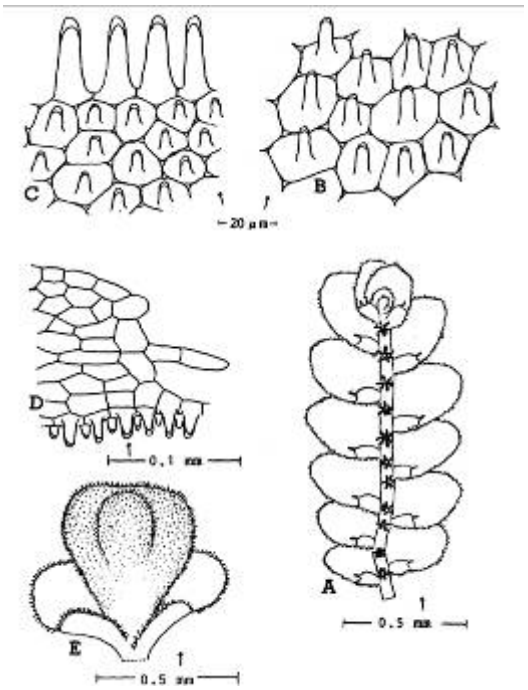
水谷正美, 1961. 日本産クサリゴケ科の再検討. 服部植物研究所報告, 24: 115-302.（英文）
児玉務, 1972. 近畿地方の苔類. 大阪市立自然科学博物館収蔵資料目録第 4 集: 117-248. 大阪市立自然科学博物館.

<コケ植物　苔類　クサリゴケ科>　　愛知県：絶滅危惧ＩＢ類（国：リスト外）
<BRYOPHYTA　HEPATICOPSIDA　LEJEUNEACEAE>　　AICHI：EN　（JAPAN：－）

ウニバヨウジョウゴケ　*Cololejeunea spinosa* (Horik.) Pande et Misra

【選定理由】

本種は、湿潤な渓流域に生える小形のシダの生葉上に生えるため、着生基物としては不安定な状態にあり、生育環境の悪化で絶滅する恐れがある。低木やシダの生葉上に生える着生苔類の一群は環境の変化に極めて敏感であるため、これらの一群を指標にして環境の自然度を評価することができる。



A. 植物体の一部 (腹面観). B-C. 葉の細胞 (B.葉縁部, C.中央部).
D. 葉腹片の先端部. E. 花被.
新城市 (旧鳳来町) 名号, 高木典雄-48928.　山田耕作 描画

【形　態】

植物体は生葉上に生える。長さは 5mm で微小。葉は茎から横に出て卵形、葉の縁には刺がでる。葉（上片）の背面の細胞には 1 細胞につき 1 個の刺状突起がある。葉下片は卵形、頂端には 2 歯がでるが中央の歯は長く 2 細胞からなる。下片の表面には刺状突起はでない。下片の基部近くには 1 細胞からなる柱状細胞がある。花被は刺で被われる。雌雄同株である。

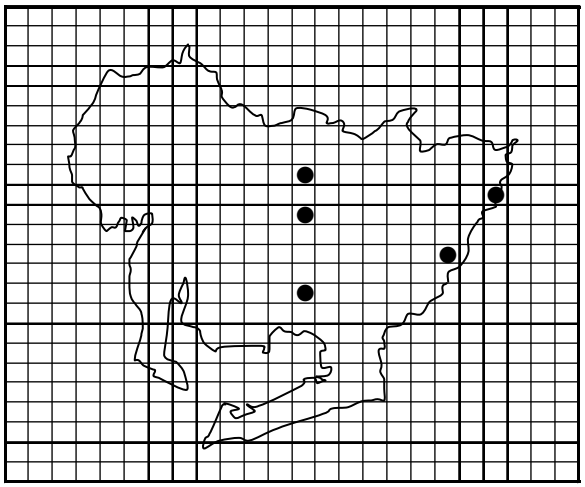
【分布の概要】

【県内の分布】
県内の三河の山間部から記録されている。

【国内の分布】
琉球諸島、九州、四国を経て本州では福島県いわき市（北限地）まで分布している。

【世界の分布】
インド、中国、台湾、韓国、日本（北海道には記録がない）に分布している。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

陰湿な林内、林間を流れる渓流域に育つシダ（コウヤコケシノブ、ウチワゴケ）の生葉上によく生える。極めて不安定な生葉上に生育するために、無性芽による繁殖が盛んである。

【現在の生育状況／減少の要因】

三河の山間部に分布するが、個体数は極めて少ない。

【保全上の留意点】

林間を流れる湿潤な渓流域周辺一帯の保全に十分な配慮が必要である。

【特記事項】

葉背片の表面には刺状突起が生じるので、ルーペで容易に識別できる。

【関連文献】

岩月善之助(編), 2001. 日本の野生植物 コケ, 352 pp. 192 pls. 平凡社, 東京.

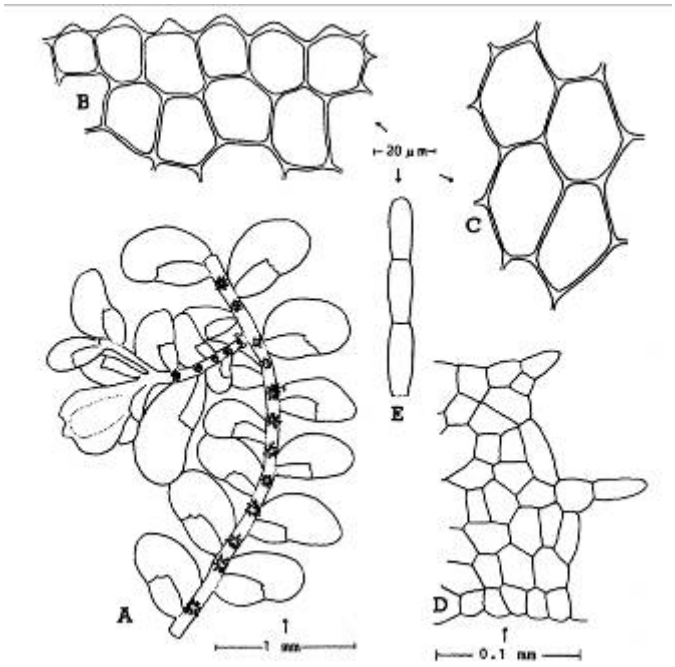
ヨウジョウゴケ　*Cololejeunea trichomanis* (Gottsche) Steph.

【選定理由】

本種は湿潤な渓流域に生えるシダ、低木の生葉上、樹幹、湿った岩上、大形の蘚苔類の上に生えるため、生育地の改修工事を行えば生育環境の悪化に伴い絶滅する恐れがある。山間の渓流域に生える葉上着生の一群は環境の変化に極めて敏感であるため、これらの一群を指標にして環境の自然度を評価することができる。

【形　態】

植物体は小さく 10mm ていどの長さ、葉の上片は楕円形、葉の先端部は円く、葉の縁は鈍鋸歯状となり、葉細胞の角隅は大きい。葉の下片は膨らみ、頂端に鋭い 2 歯がでるが中央の歯は大きく 2 細胞からなる。葉下片の基部近くにつく柱状細胞は細く、1〜3 細胞からなる。雌雄同株である。

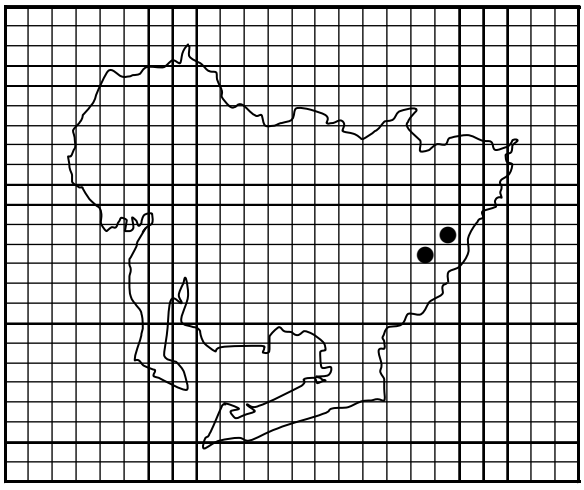


A. 花被を付けた植物体の一部 (腹面観). B-C. 葉の細胞 (B.葉縁, C.中央部). D. 葉腹片の先端部. E. スチルス.
新城市 (旧鳳来町) 乳岩, 山田耕作-20934.　山田耕作 描画

【分布の概要】

【県内の分布】
新城市（旧鳳来町）に分布している。
【国内の分布】
琉球諸島から秋田県の和賀山（北限地）あたりまで分布している。
【世界の分布】
オーストラリア、東南アジアから中国、フィリピン、台湾、韓国に分布している。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

小さな渓流域に生えるシダの生葉上や、樹幹、岩上、蘚苔類上に着生する。

【現在の生育状況／減少の要因】

新城市（旧鳳来町）乳岩で確認したが、個体数も少なく極めて稀である。

【保全上の留意点】

森林内外及び山あいを流れる渓流域周辺の保全に注意が必要である。

【特記事項】

長年にわたって使われた *Cololejeunea goebelii* の学名は、*C. trichomanis* の異名に落とされた（Grolle, 2001）。

【引用文献】

Grolle, R. 2001. Miscellanea hepaticologica 291-300. Haussknechtuia, 8: 59-69.

【関連文献】

小笠原昇一, 1975. 愛知県内の葉上苔について. 研究集録 12: 40-42. 愛知県理科教育研究会高校部会.

＜コケ植物　苔類　クサリゴケ科＞　　愛知県：絶滅危惧Ⅱ類　（国：リスト外）
＜BRYOPHYTA　HEPATICOPSIDA　LEJEUNEACEAE＞　　AICHI：VU　（JAPAN：－）

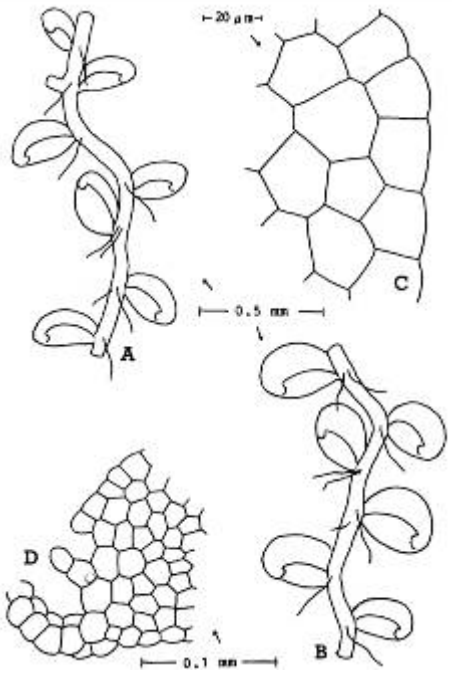
マルバヒメクサリゴケ　*Cololejeunea minutissima* (Sm.) Schiffn.

【選定理由】

樹幹上に着生するため、生育地周囲の開発、森林伐採などの影響に対して非常に敏感で絶滅する恐れがある。低木の樹幹上に生える着生苔類の一群は環境の変化に極めて敏感であるため、これらの一群を指標にして環境の自然度を評価することができる。

【形　態】

植物体は微小、5mm 前後の長さ、葉は折りたたみ型、葉は円形から広卵形、葉の細胞の膜は薄く角隅はない。葉下片は卵形からだ円形、全体に膨らみ、頂端に 2 歯がでて中央の歯は大きく 2 細胞からなる。柱状細胞は微小。雌雄同株である。花被には 5 個の襞（ヒダ）がある。

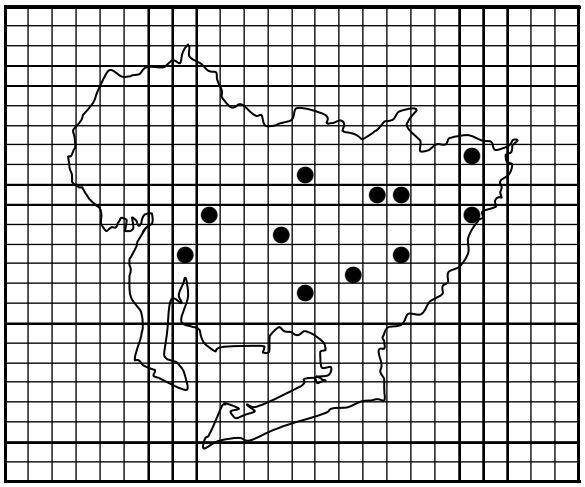


A,B. 植物体の一部 (腹面観). C. 葉縁部の細胞. D. 葉腹片の先端部.
岡崎市闇苅渓谷, 山田耕作-20633
D.孫福･山田, 1964.より転写.　A,B,C. 山田耕作 描画

【分布の概要】

【県内の分布】
刈谷市、岡崎市、豊田市足助町から知られている。
【国内の分布】
琉球諸島を経て宮城県鹿島台町(北限地：横山, 2001)辺りまで分布している。
【世界の分布】
アフリカ、ヨーロッパ、北アメリカ、ネパール、中国、台湾から日本に分布している。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

主に樹幹や枝に着生するが、他のヨウジョウゴケ属 *Cololejeunea* と比べると、やや乾燥気味の場所に生える。

【現在の生育状況／減少の要因】

北設楽郡豊根村、東栄町、新城市鳳来町、岡崎市闇苅渓谷等の三河山間部地帯に分布している。

【保全上の留意点】

森林内外の伐採及び周辺一帯の保全に注意する。

【引用文献】

横山正弘, 2001. コケ(蘚苔)植物. 14-67. 宮城県植物目録 2000. 378 pp. 宮城植物の会･宮城県植物誌編集委員会.

【関連文献】

岩月善之助･水谷正美, 1972. 原色日本蘚苔類図鑑. 405 pp. 保育社, 大阪.
岩月善之助(編), 2001. 日本の野生植物 コケ, 352 pp. 192 pls. 平凡社, 東京.

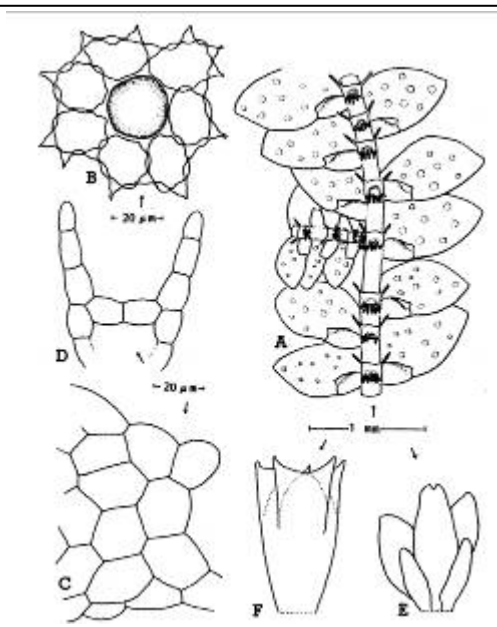
＜コケ植物　苔類　クサリゴケ科＞　　愛知県：絶滅危惧Ⅱ類　（国：準絶滅危惧）
＜BRYOPHYTA　HEPATICOPSIDA　LEJEUNEACEAE＞　　AICHI：VU　（JAPAN：NT）

カビゴケ　*Leptolejeunea elliptica* (Lehm. et Lindenb.) Schiffn.

【選定理由】

谷あいや滝周辺の湿潤な生態系が開発され、周辺一体の植生に変化がおきると、最初に空中湿度の変化に敏感に反応する一群であるため、環境の自然度を推し量る指標種となる。

今回、評価区分を見直したのは、個体数は少ないが、三河山間部に広く点々と分布しており、各地域の保全状況を評価すると、急に減少する恐れがないと判断された。



A. 植物体の一部 (腹面観). B. 葉中央部の細胞と眼点細胞. C. 葉腹片の先端部. D. 腹葉. E. 雌包葉と腹包葉. F. 花被.
岡崎鳳来教育林, 山田耕作-20933.　山田耕作 描画

【形　態】

植物体は長さ 3～5mm、黄緑色。葉には普通の細胞に比べて大きい異形細胞（大きい 1 個の油体が見られる）がある。腹葉は茎の腹面に離れてつき、裂片は刺状となる。花被は膨らみ、三角状の翼となった 5 個の襞がでる。雌雄同株である。

【分布の概要】

【県内の分布】

三河の平野部、山間部に分布している。

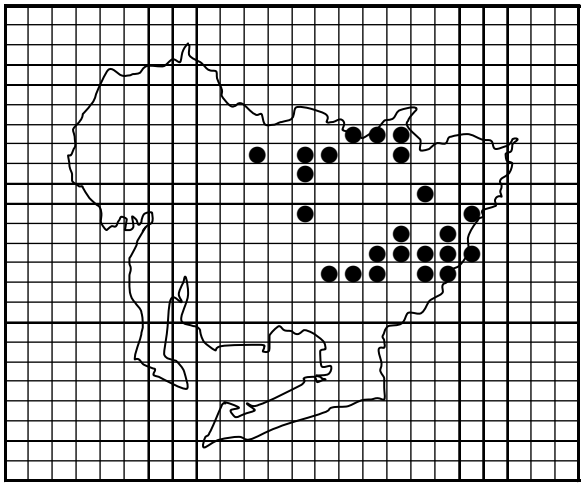
【国内の分布】

琉球諸島を北進し、九州、四国から東北地方の福島県双葉郡木戸川渓谷（北限地）あたりまで分布している。

【世界の分布】

世界の亜熱帯、熱帯地域に広く分布する。アジアでは、一部が東アジアからフィリピン、中国、台湾、琉球を経て日本まで広く分布している。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

山間の狭い谷間を流れる渓流域の湿潤な場所や、滝に近い空中湿度の高い環境で生育している。本種は、本来常緑の低木やシダ類、ヤブミョウガなどの生葉上に着生するが、場所によっては樹幹や枝上に、稀に湿岩上に着生することもある。

【現在の生育状況／減少の要因】

個体数は少ないが、三河山間部に広く分布している。しかし、湿度の高い渓流域周辺の河川改修並びに森林伐採が生育地の環境に影響しているものと思われる。

【保全上の留意点】

谷あいを流れる渓流域の河川改修並びに周辺一体の保全に注意が必要である。

【特記事項】

植物体から芳香性のある揮発性物質を飛散する。

【関連文献】

小笠原昇一, 1975. 愛知県内の葉上苔について. 研究集録, 12: 40-42.
岩月善之助(編), 2001. 日本の野生植物 コケ, 352 pp. 192 pls. 平凡社, 東京.

＜コケ植物　苔類　ケビラゴケ科＞　　愛知県：絶滅危惧Ⅱ類　（国：リスト外）
＜BRYOPHYTA　HEPATICOPSIDA　RADULACEAE＞　　AICHI：VU　（JAPAN：－）

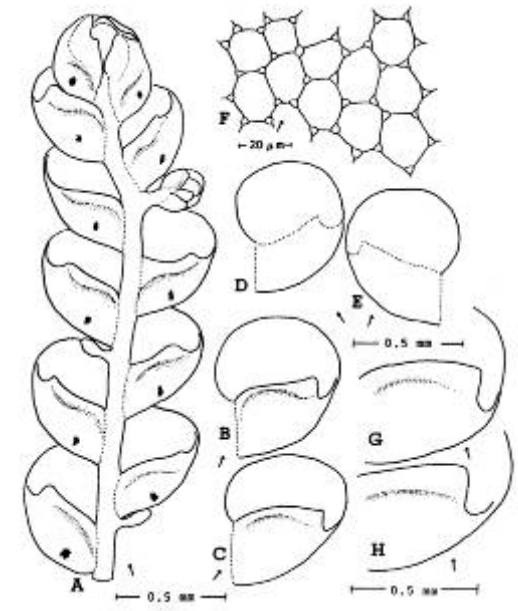
オオシタバケビラゴケ　*Radula cavifolia* Hampe ex Gottsche, Lindenb. et Nees

【選定理由】

樹幹上に着生するため、生育地周辺の開発、森林伐採などの影響に対して非常に敏感で絶滅する恐れがあるためによる。

【形　態】

植物体は小さく（10mm 以下）、葉は2つに折れる折りたたみ型。葉の上片、下片共に卵型、下片は上片に比べて大きく、かなり膨れて上片の長さの 2/3 以上になる。下片のキール（龍骨部）は弓状にふくらみ、下片の基部は茎を被わない。葉の細胞は小さく、膜は薄く、トリゴン（角隅）は小さい。雌雄異株である。

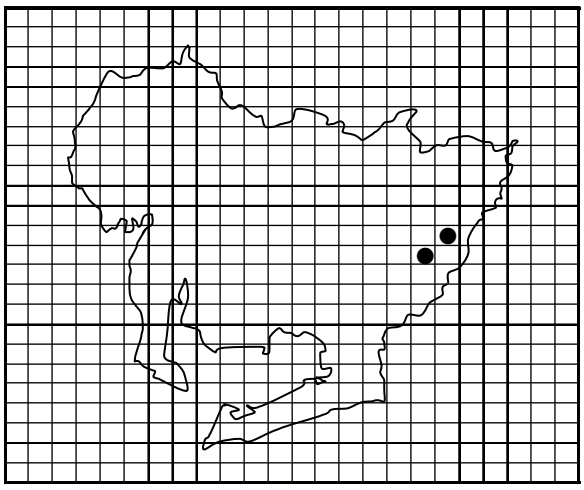


A. 植物体の一部 (腹面観). B-E. 葉 (D-E.背面観). F. 葉中央部の細胞. G,H. 葉腹片の先端部.
新城市鳳来寺山, 小笠原昇一 2301-NICH.　山田耕作 描画

【分布の概要】

【県内の分布】
新城市鳳来町で採集されただけである。
【国内の分布】
琉球諸島から九州、四国を経て神奈川県（西丹沢白石峠が北限地）あたりまで分布しているが産地は少ない。
【世界の分布】
東南アジア、フィリピン、台湾、中国、韓国に分布している。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

やや明るい林内の樹幹上や、稀に岩上に生えるが、単独でマット状になって生えることは少ない。

【現在の生育状況／減少の要因】

新城市鳳来町で確認したのみで他には記録がない。

【保全上の留意点】

生育地周辺一帯の森林の保全が望ましい。

【特記事項】

本種はマット状に生えることがないために、他のコケ植物に混生することが多く、入念に調査しないと採集が難しい。

【関連文献】

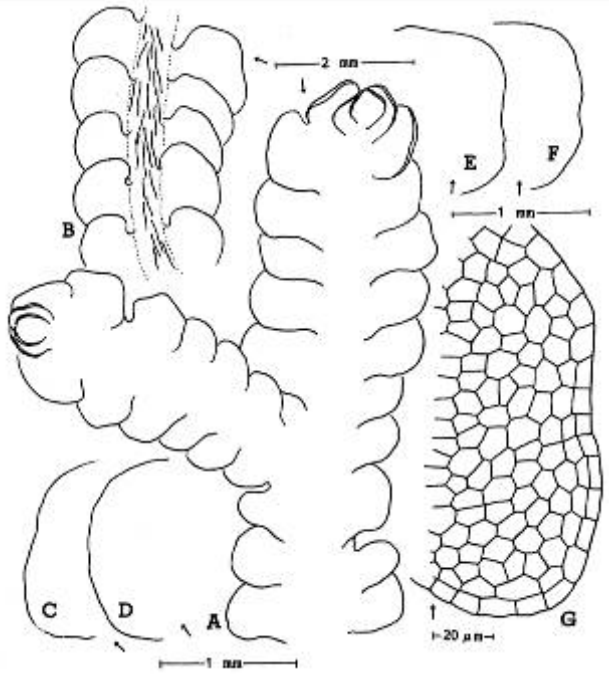
山田耕作, 1996. 日本産のケビラゴケ属(苔類). 自然環境科学研究, 9: 63-96.
岩月善之助(編), 2001. 日本の野生植物 コケ, 352 pp. 192 pls. 平凡社, 東京.

シフネルゴケ　*Schiffneria hyalina* Steph.

【選定理由】

葉状体から茎葉体への推移を示す特異的な形をしているが、本種は二次的に茎葉体の形が葉状化したものと考えられる。水気の多い湿土上に生育するため、生育地周辺の開発、森林伐採などの影響に対して非常に敏感で絶滅する恐れがある。

設楽町の山林内に個体数は少ないが、広く点々と分布している。これらの生育地の保全状況をみると、急に減少する恐れがないと判断されたため、今回評価区分の見直しを行なった。



A,B. 植物体の一部 (A.背面観, B.腹面観). C-F. 葉の先端部. G. 葉先端部の細胞.
新城市鳳来寺山, 高木典雄 6154-NICH.　山田耕作 描画

【形　態】

植物体は 20～30mm の長さ、白緑色でやや半透明、扁平状である。茎と葉の区別が明瞭でない。葉は茎の横に出て、ゆるく重なり半円形、先端は丸く葉の縁は緩やかに波状。葉細胞は大きく、膜は薄膜でトリゴンを欠く。腹葉はない。仮根は茎の腹面に生じる。雌雄異株である。

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市鳳来寺山、設楽町から知られている。

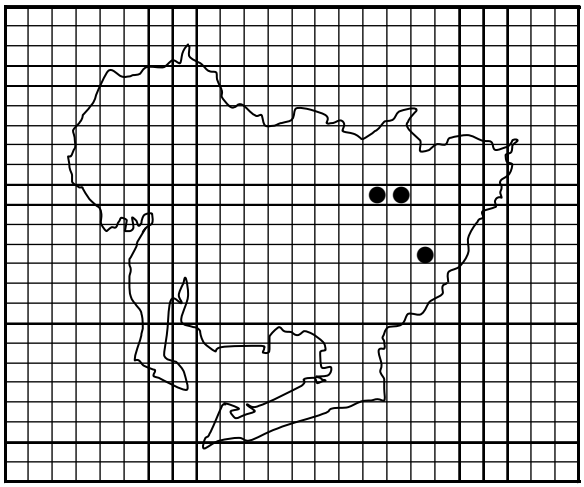
【国内の分布】

琉球諸島から青森県（北限地）辺りまで分布している。本州での産地は概して裏日本に少ない。北海道には分布しない。

【世界の分布】

ヒマラヤ、タイ、マレー半島、スマトラ、ニューギニア、中国、台湾を経て日本に分布している。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

湿潤な森林内の風倒木、腐葉土上、樹幹の基部に生えるが、湿岩上に生えることもある。スギ林内でよく見つかる。

【現在の生育状況／減少の要因】

現在、設楽町で生育が確認されているが少ない。

【保全上の留意点】

湿潤な森林内及び森林周辺一帯の保全が必要。

【特記事項】

茎の周りに円い翼状の葉を出すため肉眼でも識別できる。

【関連文献】

岩月善之助(編), 2001. 日本の野生植物 コケ, 352 pp. 192 pls. 平凡社, 東京.

＜コケ植物　苔類　ウキゴケ科＞　　愛知県：絶滅危惧Ⅱ類　（国：準絶滅危惧）
＜BRYOPHYTA　HEPATICOPSIDA　RICCIACEAE＞　　AICHI：VU　（JAPAN：NT）

ウキゴケ　*Riccia fluitans* L.

【選定理由】

水田、沼、池等の埋め立て、休耕水田の増加、並びに除草剤の利用、環境の悪化による水質汚濁等が本種の減少に影響しているものと考えられ、水田地帯の自然度を推し量る指標種となる。今回、評価区分を見直した理由は、水田への灌水、時には洪水等によって水中性の個体が移動し、年々、生育地が転々と変わるため、生育地の特定が出来ず、さらに、減少の判断が難しい点を考慮してランクの見直しを行なった。

植物体 (休耕水田の土上に生育).
豊田市足助町御蔵, 1998 年 8 月 2 日, 山田耕作 撮影

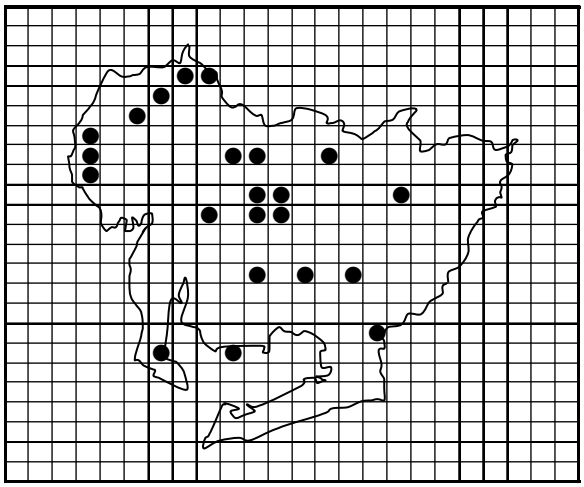
【形　態】

植物体は葉状体で、線形、長さは 10～30mm、数回叉状に分枝し、葉の頂端は凹形となる。植物体の裏面には仮根や鱗片状の付属物はなく、植物体の内部には大型の気室がある。

【分布の概要】

【県内の分布】
都市部を除いた農村地帯に分布している。
【国内の分布】
琉球諸島から北海道にかけて分布している。
【世界の分布】
全世界に広く分布している。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

池、沼、農水路、清流の流れる溝、時には水田等の水中で団塊状になって生えるが、水面上に浮かぶこともある。稲刈りあとの水田等では土上に生える。1 年生植物で、水中型と地上型の 2 型がある。主に水中型は生殖器官ができず、仮根を生じない。一方、地上型は稀に生殖器官をつけ、仮根を生じる。

【現在の生育状況／減少の要因】

都市部を除いた県下全般に分布している。主な生育地の水田地帯の改修と除草剤の使用が減少の一因とも考えられるが、時には洪水等によって水中性の個体が移動し、年々、生育地が転々と変わるため、生育地の特定が出来ず、さらに、減少の判断も難しい。

【保全上の留意点】

水田地帯の改修（事前の予備調査が必要）と除草剤の散布に配慮が必要である。

【特記事項】

戦後まもなく水田の除草剤として 2-4D を使用したため、一時壊滅状態になったことがある。しかし、近年は少しずつ分布域を広めつつある。湧き水の箇所では一年中見られる。

【関連文献】

岩月善之助(編), 2001. 日本の野生植物 コケ, 352 pp. 192 pls. 平凡社, 東京.

＜コケ植物　苔類　ウキゴケ科＞　　愛知県：準絶滅危惧　（国：準絶滅危惧）
＜BRYOPHYTA　HEPATICOPSIDA　RICCIACEAE＞　　AICHI：NT　（JAPAN：NT）

イチョウウキゴケ　*Ricciocarpos natans* (L.) Corda

【選定理由】

水田、沼、池等の埋め立て、休耕水田の増加、並びに除草剤の利用、環境の悪化による水質汚濁等が本種の減少に影響しているものと考えられ、水田地帯の自然度を推し量る指標種となる。今回、評価区分を見直した理由は、水田への灌水、時には洪水等によって浮遊性の個体が移動し、年々、生育地が転々と変わるため、生育地の特定が出来ず、さらに、減少の判断が難しい点を考慮してランクの見直しを行なった。

植物体 (水田稲刈後の土上に生育).
岡崎市額田町河原, 2000 年 10 月 22 日, 山田耕作 撮影

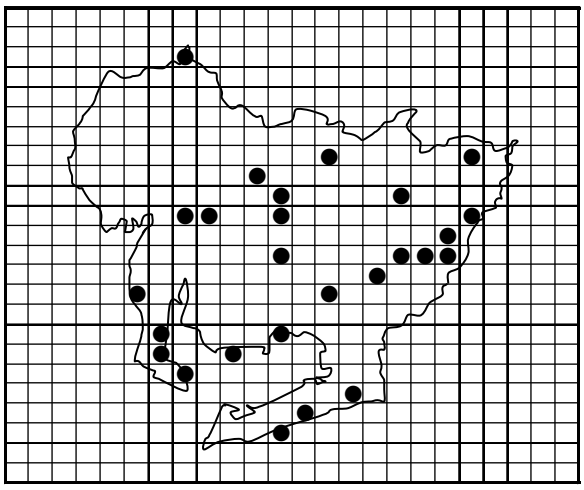
【形　態】

植物体は葉状体で、イチョウの葉形に似る。表面には光沢と浅い溝があり、裏面には黒紫色の腹鱗片が生えるので近縁種のウキゴケと識別できる。雌雄同株。生殖器は葉状体の内部に埋もれて見えない。水面上に浮遊すためために、葉状体の内部に気室を作り、さらに浮遊中のバランスを保つ鱗片が発達する。

【分布の概要】

【県内の分布】
三河の平野部、山間部から知られている。
【国内の分布】
琉球諸島から全国各地に分布しているが、北海道には記録がない。
【世界の分布】
広く世界の各地に分布している。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

水田、沼、池等の水面に浮遊する。特に水田ではウキクサと混生する事が多い。収穫後の水田では、泥土上に生える。水上型（水面に浮遊し、腹鱗片がよく発達している）と陸上型（湿土上に生え、腹鱗片はあまり発達せず、仮根が生える）の 2 型が見られる。暖地では葉状体で越冬する。

【現在の生育状況／減少の要因】

都市部を除いた県下全般に分布している。主な生育地の水田地帯の改修と除草剤の使用が減少の一因とも考えられるが、時には洪水等によって浮遊性の個体が移動し、年々、生育地が転々と変わるため、生育地の特定が出来ず、さらに、減少の判断も難しい。

【保全上の留意点】

水田地帯の改修（事前の予備調査が必要）と除草剤の散布に配慮が必要である。

【関連文献】

岩月善之助(編), 2001. 日本の野生植物 コケ, 352 pp. 192 pls. 平凡社, 東京.